

# ドナウ源流行

齋藤茂吉

青空文庫



## 一

この息もつかず流れている大河は、どのへんから出て来ているだろうかと思つたことがある。維也納生れの碧眼の処女とふたりで旅をして、ふたりして此の大河の流を見ていた時である。それは晩春の午後であつた。それから或る時は、この河の漫々たる濁流が国土を浸して、汎濫域の境線をも突破しようとしている勢を見に行つたことがある。それは初冬の午後であつただろうか。そのころ活動写真でもその実写があつて、濁流に流されて漂い著いた馬の死骸に人だかりのしているところなども見せた。その時も、この大河の源流は何処だろうかと思つたのであつた。

地図を辿つて行くに、河は西南独逸の山中から細くなつて出て来ている。僕は民頭ミューンヘンに来てから、『Die Donau』という書物を買つた。これは、Schweiger 《シユワイゲル》-レルヘンフェルトの撰で、西紀一八九六年に維也納から出版されたものである。僕は此の書物を愛して時々拾読した。その中には Donau 《ドーナウ》を中心として、地理学・水路学・船舶学・人類学・考古学・博物学・歴史があつた。おなじ大河でも Wolga 《ウォオルガ》

と Donau 《ドーナウ》とは趣のちがうことをいうあたりには何かの感激があった。それから、Donau 《ドーナウ》に沿うた維也納の古い絵図などを見ると、やはりなつかしい気持が湧き、それは、ヨハン・シュトラウスの、『Spiegelt sich in deiner Wellen Tanz』<sup>なぐ</sup>という歌曲に因るのみではなかった。

僕は地図のうえのその細い流を实地に見たいとおもい、復活祭の休を利用しようとした。そこで、西紀一九二四年四月十八日、午前七時半の汽車で、民<sup>ミュンヘン</sup> 頭を出発した。この汽車は、Augsburg 《アウグスブルク》、Ulm 《ウルム》を経て Stuttgart 《シュツットガルト》の方へ行く急行列車である。僕はその三等車内において気を落付けている。今朝、宿の媪 Hillenbrand 《ヒルレンブランド》が六時に僕を起して、朝食を食べさせて呉れたのであった。

朝はまだ早いの焔では農夫がもう働いていた。妻が牛の口を取り、夫が鋤の方を操縦しているのなども目についたが、きようは Karfreitag である。復活祭前の金曜であるのにこうして農夫は働いているのが目についた。維也納の郊外に行ったときも日曜に農夫が幾たりも働いていた。これは信心ぶかくないという証拠にはならなかった。然し春寒であるから耕し了えた畑はまだ幾枚もない。冬枯の草で蔽われているところを田鼠<sup>もぐら</sup>が恣に歩くの

で、掘りかえされた土が小さい山の様になって幾つも見えていた。そのうち、汽車が走るにつれて、畑の間を一直線に流れている水が見えたり、白樺の林が松林になり、縦林になり、落葉樹林になる。けれども大体の風光は、ゆるやかな勾配を持った畑と草野から成立っていると言っている。これは壤太利でも同じである。

僕は民<sup>ミン</sup>頭<sup>トウ</sup>の停車場から買つて来た新聞を読むと、それに日本人の記事があつた。北米合衆国で日本の移民問題が紛糾しかつた時に、その記事がちよいちよい独逸の新聞にも載つた。きよの日本人に関する記事というのも、自然亜米利加との問題からの連想であつた。未だ大戦の起らぬだいぶ前に記者は露西亞に旅したことがある。その同じ列車に日本の留学生も五六人いた。ある時、汽車の旅の無<sup>ぶ</sup>聊<sup>りょう</sup>に、みんなが餐<sup>さん</sup>を共にし、酒も飲んだ。日本の留学生の二三は快活に飲み快活に話したが、二三の留学生は黙々として何も語らない。ところが其の沈黙の一人が何かのはずみに、『私どもは天皇のために命を捨てることなどは何でもありません』と云つた。これが記者には何かを暗指<sup>あんじ</sup>している異様な響きで聞こえたのであつた。そこで記者は、『御国<sup>おくに</sup>のいまの天皇の御名前は何と仰せられますか』と問うた。するとその沈黙の留学生は、『私どもは決して天皇の御名前を申あげることはありません』と答えた。そして、『それは畏<sup>おそれ</sup>多<sup>おほ</sup>いことだからです』と付加えた。

そういう話であるが、その沈黙の留学生の言葉を記者は今おもい起して、亜米利加問題と  
或る関連を有たせたいのであった。そして、その記者は、日本の国民は何時でも天皇のた  
めに命を捨てるものだと言ひ居た。そして、*「schweigsame Japaner」* など言つ  
て、底気味の悪い国民だということを其処に暗指していた。

僕はその記事を読んで心中秘かに微笑した。そして、その沈黙の留学生は、天皇の御名  
を睦<sup>むつひと</sup>仁と申し奉ることを知らなかつたのだらうと思つたのである。併し僕はこの記事を  
読んでから、眼を瞑つてしばらく思に耽つていた。

そのころの独逸の漫画雑誌には又、こんなのがあつた。絹<sup>シルク</sup>帽<sup>ハット</sup>に星のついたのを冠つ  
ている老翁の寢部屋に一つの尾長猿が這入つて来ているところが先ず画いてある。老翁が  
猿の尾をつかんで、*「Der verdammte Japs hat nichts bei mir zu suchen!」* といつてゐる。その  
次は、老翁が両手で猿の尻尾をしっかりと握つて放り出そうとしている。翁は忿怒の相を  
して、絹帽は飛んでしまつてゐる。猿は放り出されまいとして両手で翁の寢衣<sup>ねまぎ</sup>の臀<sup>しり</sup>の処の  
ずぼんにかじり付いてゐる。その次は、もう翁の白髪は逆立っている。猿の体が延びて彎  
曲して断れ<sup>ちぎ</sup>そうになつてゐる。それでも猿は苦しまぎれに寢衣にかじり付いたから、寢衣  
はずるりと捲<sup>まく</sup>れて、老翁の臀が全く露出したところである。そして老翁の眼は爛々とかが

やいている。僕はこの絵を見てなかなか旨いと思った。旨いと思ったのはその画方<sup>がほう</sup>にあって、今はその筋書が頭に浮んで来ている。僕はその絵のことを思い出してしばらく思に耽つていた。

この新聞にも、四月十七日発の華盛頓電報で移民法案が既に決められたことを報じている。四月十七日といえは昨日<sup>きのう</sup>である。それから巴里発電報では、石井大使がポアンカレを訪うて懇談したことをも報じている。そして、仏国は日本とは親善の間柄ではあるが、この問題に就いては不干の状態に処るだろうということが付加えてあった。僕には一国のことは余り大き過ぎる。けれども之を個人の間柄に還元して観るなら、随分その例に乏しくない。

けれどもその間は十分間ぐらいに過ぎなかったであろう。窓外には緩い線の丘から赤い屋根が見えたり隠れたりしている。畑の小路に十字架の耶蘇が祭つてある。小さい沼が見えて静かな水が湛えている。国家ということを思う。民族ということを思う。コスモポリートのことを思う。併しそういう観念はいつのまにか朦朧となつてしまふのであった。

車内で少しの間まどろんだとおもうと、汽車は Augsburg 《アウグスブルク》 に著いた。寺院の大きいのが見え、家屋も急に高くなつたように思えた。ひとりの貧しい身装みなりをした娘が、汽車の窓のところに来て、麵麩ぼんと燻肉くんにくと復活祭の卵を売ろうとしている。Osterrei; Osterrei と細いこえでふれて歩いているのが、何となくものあわれである。卵は一樣に褐色に色づけてあつたり、色々の模様があつたりした。僕の近所では誰も買うものはない。僕は一寸ところが動いたが、心中に何物か抑制するものがあつて到頭その卵を買わずにしまった。

停車場に、殺人犯の者を幾百マルクの懸賞で捜す警察署の貼紙がある傍に、手提かばんを盗まれて、二十金貨マルク懸賞の小さい貼紙などのあるのも目についた。

Offingen 《オツフィンゲン》 駅を過ぎたころ、そのあたり一面は落葉樹林で、また伐ばつば木が盛にしてある。土手には葦が沢山咲いている。その小流の汀には菖蒲のような草がもう萌えている。それから、川柳の背の高いのがそのあたり一帯にあつて、花はもう盛さかりを過ぎてほほけている。僕は、「これは何かの流に近くなって来たのだな」とおもつた。もう少し行くと、果してドナウが直ぐ傍を流れていた。僕は心のはずむのおぼえた。川

柳の群生を透して、ドナウは稍水蒿が増して、岸を浸さんばかりになって流れているのが見える。即ち『充満』の気魄である。汽車は暫らくドナウに沿うて走った。その岸をふたりの若者がもう外套も著ずに散歩していた。汽車の通るとき、まぶしそうにこちらを見ていたが、手を活潑に振って僕らの汽車を祝福した。

汽車はDIE《ウルム》について僕は下車した。伽藍の大きいのが直ぐ家並から擡んで見える。午にはまだだ**いぶ**あるので、僕は手提かばんを停車場に預けて町へ出掛けた。ウルムは十四世紀から十五世紀にかけて栄えた都で、今でもウイルテンベルクの首府である。古い建物が今でも処々に残っている。[Munster] (伽藍)の前に行くとき悲しい歌のこえが聞こえているが戸を閉してある。そして僕のような旅人は中に這入れない。為方がないから僕は其処を去って下手しもての方へ下りて行った。そこに古代の石門がある。時代を食って物寂びしているが、そこを僕はくぐって行った。すると直ぐドナウの岸に出た。岸のところところに石で畳んだ散歩道が出来ていて、恰も石の廻廊のようになっている。両側の石壁も可なりの厚みがあるから、童子等はその上をも歩いている。穉児などは散歩道からその石壁に両手でつかまって、背延びをして、辛うじてドナウの水を見ている。その散歩道を大勢の人が往反している。なかには石壁に腰かけて話しているものもいる。そこを歩きな

がら石壁の向うの家の人と大ごえで話したりする。石壁の向うの家々は皆古く、壁に古風な絵模様を画いたのなどが残っている。その人通りのなかを僕は歩き抜けたが、誰も余り顧ない。民<sup>ミューンヘン</sup> 頭のように、Japs 《ヤップス》一などというこえは一つも聞こえない。僕は静かにそこを通り抜け、古い砦<sup>とりで</sup>の残っているのを右手に見ながら、汀の方へ下りて行つた。

ドナウの水は此処は可なり急流になつている。汀に立つて岸の草を浸すところを見てみると、ドナウも平凡で、直ぐ対岸に渡れそうでもある。ただ川上から流れて来る水が、川<sup>かわ</sup>下<sup>しも</sup>の方へ稍低くなつて行き、そこに瀬を作り、瀬が鳴つて二たび川<sup>かわ</sup>下<sup>しも</sup>の方へ流れて行つてしまふところまで一氣に見ると、このドナウもやはり犯し難いところがあつた。

そのの岸に、水泳のために建てた粗末な建物などがあつた。そこに童子等の楽書なども見える。8 tungi などと云つて、二つも三つも書いているのは、Achtung の洒落であつた。なかには稚ごころに文字を模様風に書いたのなどもある。業<sup>ラボラトリウム</sup> 房 から放たれたような気楽さで旅している僕も、気が付けばやはり異国にいるのだということが染<sup>しみ</sup>々と思えた。天が好く晴れて、日はもう中天にのぼっている。ドナウの水の清く澄んでいる汀のところ蹲<sup>すま</sup>んで、魚でも泳いでいるかと思つて見ていたが魚は一つも見えなかつた。そんなら

魚の子でもいるかと思つたが、それも見えなかつた。川下の方に支流が一つ合している。これは Blau 《ブラウ》 川である。そこに五六人が釣を垂れていた。そして家鴨が水に入つたりまた出たりしていた。小学生が十四五名通つて行つた。皆白い帽子を冠つているのが目に付いた。

「それでは、一つ鯉をあげましょうか。ドーナウの鯉でございますよ」

「そいつは珍しいね。ひとつ旨く料理して呉れ」

「よございます。お国ではどうして召上りますか」

「そうだね。一寸むずかしいが、まず Maggi のようなもので煮ても食べるね。それは様々だ。何しろ日本は魚を沢山食べるところだから、料理の為方がなかなか発達しているからね」

「さようでございますか。日本はキナの方でございましたね。行くのに何日ぐらいかかるのでございますか」

「まあ船で五十日だね」

お上は、「ほおー」と云つて、右の手を妙な工合にあげて台所の方に行つてしまった。

「Wirtschaft zum Ulmerspitz」という看板を出している小さい食店である。僕は川岸

を離れて、市役所の壁に色々の壁画の描いてあるのを見、それから市立浴場を覗き、こういう町にふさわしくないような急進派の画家のものなどを並べてある店を覗いたりして、ここの食店へ入って来たのであった。思い切つて肥つたお上は愛想よく僕にのしかかるようにして、今日は獣肉を食わないことを説き、卵と魚ならあるというので、此の如き問答が始まったのであった。僕はここで鯉を食べて秘かに幸福を感じていた。それから葡萄酒をやめて、Goldochsen-Bierという銘の麦酒を飲んだ。これは通人の飲むものでは無かるうが、微かに植物の花のような香がして僕には気に入った。僕の味覚は、ここのウルムの住民ぐらいのものであった。

物理学者の Einstein 《アインシュタイン》もこの町に生れた。それからこのごろ、日本と関係ふかかった Siebold 《シイボルト》(1796-1866)の妹さんが、郊外に住んでゐることを知つたので、上さんに一寸当<sup>あた</sup>つて見たが、上さんはまた怪訝<sup>けげん</sup>な顔をしたかとおもうと、亭主を呼んで来た。亭主もまた怪訝な顔をしたのは極く自然であつた。僕は稍滑稽を感じ、勘定をすませてそこを出た。

僕は心の抑制から脱して、伽藍の壁の時計の残つてゐるのを見ていた。時計の真中に黄金の光が炎のように画いてあつて、そこに針の影がうつるのである。この伽藍は、十三

世紀から始まって十六世紀頃までに出来た、ゴシック風の大伽藍である。なるほど雀が藁を啄ついはんでとまっている。これが Uimer-Spatz に相違ない。いろいろな細工と尖りが雑然として居って、僕には何だか煩わしい。旅人である上は、そういうものをも見免しては済まぬような気持が、意識の奥の方で動いているが、疲れと煩わしさがそれを否定している。美術行脚などをする人でも、やはりそうであろうか。

### 三

僕は銭を払って、伽藍の塔に昇って行った。狭苦しい石段を一つ一つ昇るのに、麦酒が廻って来ているので、動悸がしてならない。僕は目を瞑って休んでいると、下の方から活潑な足音がし出して、少年が僕をぐんぐん追越して行ったりする。僕が難儀してのぼるのに、幾人もこうして僕を追越してしまう。下の方から風があふり上げて来るので、これはなかなか気流が好く出来ているなどと思つて休んでいたこともある。けれども僕は遂に頂上までのぼって行つた。

天が美しく晴れて、其塔の頂上は風がなかなか強かつた。手で掴つかまり下の方を覗くと町

を歩く人馬じんばがすでに蟻程あぎぢやうになつて見える。僕は眩暈めまいをおぼえた。目を馴ならそうとして下方を暫しばらくらく見ていたけれども、そう急に馴なれるものでない。

今しがた僕が汀がはに立つたドナウが遙とほか下の方に小さくなつて見えている。その岸を歩く童子ごうしなどは胡麻粒ごまつぶの様だ。けれども今度はドナウが婉々こんじとして国土こくどを限つてながれて居るありさまが見える。北方はウイルテンベルクであり、南方はバイエルンである。かくの如く国を限つたドナウが西方にだんだん細くなつて行くのを僕は見ている。僕の振りさける国は一帯いつたいの平原であるが、平原に村落があり、丘陵が起伏し、森林の断続がある。そこをドナウはゆるくうねり、銀いろに光つて流れている。そのながれが遠く春の陽炎ようえんのなかに没せむとして、絹糸きぬいとの如くに見えている。

東方のドナウもついに国土こくどのなかに没した。僕は目金めがねを拭いてなお東方のドナウを見た。ドナウは、此処で *Ilar* 《イルレル》を合している。この川は南バイエルンのアルゴイ山中から発するものである。次いで、*Lech* 《レツヒ》を合する。*Lech* 《レツヒ》も南バイエルンのアルプス山系に源を発し、その道に *Augsburg* 《アウグスブルク》の市がある。それから東の方に辿ると、*Isar* 《イサール》が合する。*Isar* 《イサール》も亦遠く南方の山中から出て来て北へ流れ 民ミン 頭ケン を通つて道を東北にとり遂にドナウに合するので、そ

の口に Deggendorf 《デッケンドルフ》の町がある。それから奥太利の境に来て、Im 《イン》が合する。Im 《イン》は南バイエルンと境する奥太利の山中に発し、東へ流れ又北へ流れて独逸に入り Salzburg 《ザルツァッハ》と合して遂にドナウに灑ぐのである。灑ぐところに Passau 《パッサウ》の町がある。

ドナウが奥太利に入り東に流れて匈牙利に入る。その沿岸に、Linz 《リンツ》があり、Wien 《ウイン》があり、Budapest 《ブダペスト》がある。Budapest 《ブダペスト》以後は、急に道を南方に取り、バルカンの諸国を貫いて、遂に黒海に入るのである。ドナウの流れるバルカンには、セルボ・クロアト・スロエーンがある。ルーマニアがある。ブルガリアがある。

奥太利に入るまでの沿岸には、なおそのほかに、[Donauwo:rrh] 《ドナウウエルト》、Lechsmund 《レヒスムント》、Ingolstadt 《インゴールシュタット》、Abbach 《アプバッハ》、Regensburg 《レゲンスブルク》などの都邑がある。是等の都邑はドナウと関連して皆一時繁栄したところである。Ingolstadt 《インゴールシュタット》の如きは十五世紀に既に大学を以て響いていた。僕は伽藍の塔の上において、そういう都邑の盛衰のことなども思った。

それから朦朧として国の興亡のことなどをも思った。『die Donau』の著者は、遠くアリアン族の移住から筆を起して、石器、青銅時代の遺物に就いて記述している。それからケルト族のことも説いている。ホメールの用いた地図だの、ヘロドートの用いた地図だの、エラトステネスの用いた地図なども載っている。そういう地図を見ると、ドナウは、Ister《イステル》ともなっている。又 Danuvius 《ダヌビウス》とも云った。亜歴山大王のこと、羅馬人占住のこと、トラヤン帝の戦のこと、羅馬街道のこと、などが書いてある。羅馬人の勢が衰えて、<sup>ゴット</sup>呉底族の侵入して来たあたりから、いろいろの種族が相興亡し、東洋の種族までその辺にあばれ廻ったりなどして、次いで段々と国の出来て来る有様が書いてある。西紀第六世の終頃のクロヴァチアと、アヴァールと、東羅馬帝国との境界は全くドナウによって限られて居り、スロヴェン族の勃興した第七世紀から第八世紀にかけても、その境界はやはりドナウに拠った。匈牙利王国が起り、セルビア国と、ワラカエ国が起った時でもそうである。それゆえ、ドナウの沿岸には砦があり、軍が屯し、いろいろな哀な物語などをも残した。ニイベルンゲンの歌の如きはその一つに過ぎない。それ以後いろいろの国が起るに及んで、ドナウは必ずしもその境界ではなくなつた。そういう興亡の史蹟を此の書物が書いて居る。僕は伽藍の頂において、その輪廓をおもひ浮べていた。

伽藍の塔を降りるときには割合に活潑に降りることが出来た。伽藍の内にはもう誰も礼拝しているものはなかった。僕はそのなかを無意味に大股に歩いて、そして出て来た。街の辻々に『Hunde und Katzen sperre』などという張札がある。犬猫を拘禁して置けというのは、やはり病の予防のためだなど僕は思いながら歩いて行つた。

ブラウの水が威勢よく流れている、その流に直じかに家の建つているところがある。そういう処は古代その儘の家が残つているので、伊太利のヴェネチアを連想せしめる。また同じ水郷と云つても、日本のはも少し土地の余裕があるのに、此処のは水から直ぐ家になつていた。そして水は急流で渦巻いてながれている。こういう建築の気持は、そのまま腑には落ちなかつたが、ずっと時代を溯つて味うと、極く静かな快感をおぼえて来るのであつた。恐らく僕にはこういう鄙ひなびた寂さびに同情する心があつたのであろう。僕は其処の写真を撮らうとおもつてひどく骨折つた。童が二三人来てたかつたのを制しながら兎に角一枚撮つた。流の片側の方は恐らく旨く撮れただらう。

#### 四

僕は午後四時二十五分発の汽車に乗ってウルムを立って西へ向った。汽車は小駅にも一々停るので、非常にのろい様な気がする。発車してから暫く窓外を見ていたが、汽車はブラウの川に沿うて走っていて、それに小さい川が幾つも流れ込むのが見える。その細流の出て来るあたりは一寸日本の景色に似ていた。

急に眠くなって僕は眠った。だいぶ眠ったとおもって目醒めたが、まだ何程も来ていなかった。小さな村にも工場があり、祭日なのに烟が出ているなどと思いつながら、汽車のなかにぼんやりとしていた。そのうちまた幾らか眠った。

*Ehingen* 《エーヒンゲン》 駅に五時半に著いた。ここで黒まわし著た羊飼の帰路につくところを見た。しばらく行くと汽車はドナウの直ぐ傍を通った。ドナウは青野と畑と丘の間を極めて平淡にながれて居る。「ははあ。だいぶ細くなって来たな」こうおもいつながら、暫く流を見ている。極く平凡だが、よく見ると水量が多くて流が可なり早いのであった。水嵩の増すこともあると見え、岸の柳の木に藁くずなどが引掛つていた。

*Rottenacker* 《ロットエンアツケル》 駅を過ぎた頃に、ウイゼ草野の間にあられて見えるドナウは青く光った。湖水のようにも見えた。しばらくすると捨小舟などが一つ浮いていた。あるところでは、川筋が二つに分れて洲などを拵えている。概して陸の面とドナウの面と

は何程も違わない。時にはドナウがふくれて見えるようなところもあった。汽車は、川に離れたり近づいたりして走った。川が見え出すと、「だいぶ細くなつて来たな」いつも僕はそう思った。けれどもそれにはやはり錯誤があった。川が崖に沿うて走るようになり、白い巖壁からなる峽の鉄道橋を渡ったとき、ドナウが依然としてそう細くなつてはいなかった。

Riedlingen 《リードリンゲン》 駅に六時半に着いた。太陽は向うの丘に傾いて、美しく晴れた空にその太陽の光が銀粉をまいたようにさしていた。ドナウに中華流の小橋が懸つていたりした。向うの山上に寺が建っている。ここでも羊飼がもう帰るところで、年寄つた一人の媪が群羊を指揮して居る。そのうち太陽は紅く大きくなつて落ちた。日がかげると山陰の村落の家々の白と黒との色の交錯のなかに寺の尖塔にいままだ幽かな光の残っているなどが目についた。西に黄金の余光があり、そのうえに雲がしずかに棚びいた。

ドナウは山峡に沿うてしばらく流れた。大きな月が出たが、恰も満月であった。それがドナウを照らすと、ドナウは全く銀色になった。汽車は、Sigmaringen 《シグマリンゲン》 駅に著いた。そこで僕は夕食の麵麩を買った。独逸人が二三人乗込んで来た。僕はひとり麵麩を食っていると、リュックサック 背 囊 を棚へあげて僕のまえに腰かけた男が僕に話しかけた。

僕は麵麩を食うことをやめて暫く応対していた。

話はあるいふれた会話に過ぎなかった。また僕には込入ったことは旨く言えなかった。そのうち若者はこんなことを話した。若者は民<sup>ミューンヘン</sup> 頸<sup>ヘン</sup>の生れだが、フランクフルトに住んで、今年その大学を卒業したのである。これから三つばかり駅を行くと、その山上に孤児院がある。若者の姉はその襟母<sup>ほぼ</sup>になつてゐる。今夜はその姉を訪ねるところである、こういうのであつた。僕はこの話を聞いて心が動いた。汽車は以上のように山峽を走つてゐる。月光は流れるように谷間を照らしている。汽車が駅に著くと、若者は山上<sup>ゆびさ</sup>を指して呉れた。そして慇懃<sup>えしやく</sup>に会<sup>え</sup>釈<sup>しゃく</sup>し、僕の手を強く握つて降りて行つた。そこから僕ひとりになつた。そしてしばらく窓をあけて月の光を見た。

僕は山上の孤児院のことを思い、そこに勤めてゐる若い女のことを思つた。遙々と留学して来て以来、月光のこのように身に沁みたことは、今までになかつた。業房<sup>ぎようぼう</sup>に閉じ籠もつて根<sup>こん</sup>をつめて居たせいもあるうが、月光を顧みたことなどはついぞなかつた。然るに今夜は不思議にも、生れ故郷の月を見るような気がしてならない。この月に照らされてゐるドナウがうねりながら遙か向うに見えなくなるのをみてゐると、目に涙のにじんで来るような気がした。僕は「Tiefsten Ruhens Glu:ck besiegelnd herrscht des Mondes volle Pracht.」

のところのファウストの句、「いと深き甘寝うまいの幸さちを護りて、月のまたき光華は上にいませり」を思い出していた。

汽車の窓から、遙か向うの山上の塔に、灯のついているのが見えた。汽車が *Imnending* ⑤ 《イムメンチンゲン》に着いたのは九時四十五分である。そこで僕は汽車を乗換えた。そうしてやはりドナウに沿うて、西北へ向つて走つた。銀いろにうねっているドナウが直ぐ窓外に見えたりすると、僕はまた、「これはだいぶ細くなつた」と思った。

汽車は、十時三十分に遂に *Donaeschingen* 《ドーナウエシンゲン》駅に著いた。僕は月光を浴びて汽車から降りた。

## 五

手提かばんを持って、僕は [*Schulze*] という旅館を尋ねて行つた。そうすると、こういう辺土の旅舎であるのに、まだ宵の口の様な気分が漂うていた。僕は部屋を極きめ、それから料理二品ばかりと麦酒とを部屋に用意しておくように命じて外に出る。出口から少し行つたところから戻つて来て、ドナウがどの辺を流れているか尋ねると、帳場の若者はこ

う答えた。流は直ぐ近くにある。これは Brigach 《ブリガツハ》 川である。この流をしばらく下ると Bregg 《ブレーゲ》 川がこれに合する。ドナウはそこから始まるというのであった。早口で云われたのだが、前に地図で調べて置いたので、若者のいうことが略分かつた。若者は出口のところまで来て、流の方を指して呉れた。

なるほど川は直ぐ近くを流れていた。僕はその石橋を渡らずに右手に折れて、川に沿うて行つた。明月の光は少し蒼味あおみを帯びて、その辺を隈なく照らしているが、流は特にいろに光つて見えている。それは瀬の波から反射してくるのでなく、豊富な急流の面からくる反射であつた。川沿の道は林の中に入って、川はしばらく寂しいところをながれた。うすら寒いので、僕は外套の襟を立て、両の隠しに堅くにぎった拳を入れて歩いて行つた。深い林が迫つて来たとおもうと、水禽が二つばかり水面から飛び立つた。僕は驚いたが刹那に気を取直して、こんなことではいかぬ。何の鳥だろう。今ごろ飛んだりするのはと思つた。若し僕が、Zigeuner 《チゴイナー》 であつたら、こんな時にどうするだろうなどともおもつた。もうこのあたりの道は、人の往反が全く絶えている。

僕は小ごえで歌のようなものを歌つた。何も彼も出まかせだが、ひとりでに覚おぼえた浪花節のようなところもあつた。

これやこの、知るも知らぬも逢坂の、行きかう人は近江路や、夜をうねの野に啼く鶴も、子を思ふかと哀なり。番場、醒が井、柏原、不破の関屋は荒れはてて、ただ漏るものは秋の月。不破の関の板間に、月のもるこそやさしけれ。ありがたの利生や。おありがたの利生や。仏まいりの利生で、妻に行きあうたのう。悪しきを払うて助けたまえ、天理おうのみこと。ちよとはなし、神の云うこと聞いて呉れ、悪しきの事は云わんでな、この世の地と天とを形どりて、夫婦を拵えきたるでな、これはこの世の始だし。あしきを払うて助けせきこむ、一れつ済ましてかんろだい。山の中へと入り込んで、石も立木も見ておいた。これの石臼は挽かねど廻わる。風の車ならなおよかる。み吉野の、吉野の鮎。鮎こそは枕絵によくにしを鮎、おし鮎の口すうと人のかげごとぞうき。汗水を流して習う剣術の役にもたたぬ御代ぞめでたき。

何だか出任せであつた。けれども、小さいこえでうたう浪花節の道行ぶりのようなところも一寸あつたりして、妙に僕の心を落付かせた。僕は月光を遮えられた流の岸をこんな工合で暫く歩いた。

林が尽きて月が見えたかとおもうと、また急に流の面が光り出した。向うが開けて、平野のようになっている。月光の涯は煙っているようでもある。僕は一寸立止つたが、「ド

ナウもこれぐらい細くなればもう沢山だ」と思った。そして其処の汀の草のうえに尻をついていると、幽かに水の香かがしている。佐賀県の山中にいた時に嗅いだあの水の香と同じだと僕はおもった。たまに水が音を立てたりした。これは岸のところに来る渦の音であった。

もう余程遅いかも知れんと思つて、やおら立ちかけて、平野の向うを見ていると、また僧れいせん靈仙のことが意識をかすめた。業房に入つてやつていつている為事がなかなか片付かずに難儀した時、僕はたまたま「靈仙大徳の死」を思つて自ら慰めたのであつた。靈仙は、興福寺の僧で、延暦二十三年ごろ最さいちよう澄、空くうかい海と共に入唐した。或はもつと早く宝龜年中だという考証もある。そして長く向うに居た。長安醴泉寺僧内供奉翻經大徳として崇められたが、後、五台山に入つて修道中、人のために殺されたというのであつた。慈覚大師の『入唐求法順礼記』に「到大曆靈境寺。向老宿問靈仙三蔵亡処。乃云。靈仙三蔵。先曾多在錢勳蘭若及七仏教戒院。後來此寺。住浴室院。被人藥殺。中毒而亡過。弟子等埋殯。未知何処。」こう書いてある。最澄は延暦二十四年六月に帰朝して、八ヶ月余しか向うに居ぬ。空海は大同元年十月に帰朝して、二ヶ年足らず向うに居たに過ぎぬ。けれども最澄の道どうずい邃・順じゆんぎよう暁・行ぎようまん満などに於ける関係、經典疏注すべて二百三十部四

百六十巻其他を将来したこと。比叡山天台宗開祖となつたこと。空海の恵和・牟尼室利・曇真などに於ける関係。最澄よりももつと沢山書物しよもつを持って帰つたこと。高野山真言宗開祖となつたこと。この二人に較べると靈仙の一生は奈何にも寂しい。

伝教も弘法も共に尊むべき人である。けれども遙々ここに留学生となつて来て居る僕自身には、余り楽々と光明に耀いた二人の径路と、その求法の為方とが、先ず先ず為めにはならなかつたと謂つて好い。僕は、当時の「還学生かんがくせい」の名より「留学生」の名を好んだごとく、「在外研究員」の名を厭うて、自ら「留学生」と謂つていたのであつた。僕はみづから寂しい時には靈仙の寂しい一生を思つたのは、こういう機縁に本づいていた。僕は歩き出してからも、一寸靈仙のことを思つたが、この頃は靈仙のことにもおのずから馴れて、感激の度も薄らいで来て居つた。

僕は月光に由縁ふかい東洋詩人の感傷から離れて、大股に歩いた。併し旅舎に帰つて来た時はもう遠とほに夜半を過ぎていた。僕は自分の部屋に行つて料理を食べながら麦酒を飲んで、籠かごつている「感じて気持が好い。ことに段々と澄徹の境を離れるところにかにも安気あんきがあつた。

## 六

一夜明けて、写真機を持つて出掛けた。なるほど、ブリガツハ川は直ぐ近くにあつた。僕は昨夜のように石橋のところから右へ折れて行つた。川の水量が豊かで、張切つてながれている。川底に近いところを凝視すると、魚が群をなして泳いでいる。あるところでは水草が密生して流の方嚮に靡いて居り、そこにも魚の列が一定の保護色を保ちながら泳いで居た。魚は Forelle の一種で、民 頭ミンケンヘンの市場などでも時にこれを買ふことが出来た。

川藻の靡いているところは直ぐ徒渉し得るようにも思えたが、そうは行かなかつた。Amsel 鳥が既に啼いている。水面からたまたま魚が跳ねた。汀の或る処に清水が湧いて、其処にいろいろの水草の生えているのなどが目についた。

ゆうべ林中を通つたと思つたのは、公園の一部であつた。落葉樹は未だ芽吹かないと謂つて好いくらいである。公園から出て来て、ブリガツハに入る小川も水が極めて豊かで、溢れるようにして流れている。公園は大名（公）時代の庭園の名残で、そこに侍医の碑などもあつた。Dr. W. Rehmann. F.F. Hofrath und Leibarzt. geb. zu Donaueschingen 26. Juni 1792. gest. daselbst 7. Juli 1840. と刻してあつた。僕はその前で一寸脱帽し、それからその儘ゆ

うべのように流に沿うて歩いて行つた。

しばらくすると森林が尽きて眼界が展けて来た。ここは昨夜、月光に照らされていたところであつた。僕は昨夜のことを思い出して、「月夜のドナウ」を何とかして書いておきたいような気がした。そして昨夜は大分遠く来たようなつもりであつたが、今朝見ればそんなでもなかつた。林間をながれているブリガツハは暗く青ずんで見えている。近くの水面に浮寝をしていた禽は、いまもひとつ飛立つた。これは雁がである。未だ春寒なので雁は帰らずにいるのであろうか。晩春となればもつと北の方へ帰るのであろうかなどと思つた。飛立つた雁は余り僕を恐れぬらしく二たび少し隔つた水面に落ちた。僕は、春のドナウに浮寝している雁は、抒情詩になるだろうと思つた。

暫く行くと、向うからブレーゲが来て、ブリガツハに合した。ブレーゲは平野の彼方からながれ来るので、それが幾うねりにもうねつて、平野のすえに見えなくなつてゐる。そのブレーゲも、僕が汀に立つているブリガツハも、無障礙の日光を受けて照りかがやいて居る。まぶしく白い光の反射している水面は、何だか膨ふくれたようになって流れている。水面は直ぐ陸から続く気持で、しゃがんでその儘水を掬くぶことも出来た。ここから愈々ドナウがはじまるのである。

この張のある、白い光の耀いている水面を見ると、「ドナウもいよいよ細くなつて来た」とは言兼ねるところもあつた。けれども僕は秘かに満足せねばならなかつた。そして、ブレーゲをドナウの支流と看做して地図を辿つて行くと、ブレーゲは平野から追々谷へ入つて行つた。それから西の方へ折れて、その山中から出て来ていた。僕はドナウの写真を撮ろうとおもつたが、逆光線で旨く行かない。しかしかまうことがないと云つて二枚ばかり撮つた。僕は息のあるうちに二たび此処に来るようなことは無いと思つたからであつた。彼岸の平野の道を人が歩いていたが、非常に背が高いように見えた。

僕はドナウの流に沿うてくだることをやめ、一先ずそこで満足することにした。そして林中に入つたが、林中にも幾筋かの流があり、その浅い処に芹が萌え、靴などが棄ててあつた。車轍の跡に溜まつた水は、日が差さぬので氷つた儘になつていた。それから公園に入つて来たが、公園は相当に寂びて居り、林泉などもなかなか調つていた。赤帽をかぶつた掃除夫が道を掃除して歩いているのに、林中を野兔が駈けていたりした。

Donaueschingen 《ドーナウエシingen》は、フルステンベルヒ公の治めた処で、その居城もあり、加特利教の寺も、醸造所も、美術館も、庭も古い時代からあったものである。西暦一九〇八年の火事以来、焼けた部分の町は新しく出来たのだそうである。

僕は「ドナウ源泉」(Donaquelle)を見に行った。清冽な泉で、昔は寺の礼讃を終えてこの泉を掬んだということである。又公爵が家来を連れてここで酒宴をしたということである。この泉は、海拔六七八米。海洋に至るまで二八四〇基米と註され、大理石の群像は、バアル神が童子と娘とを連れて、行手の道を示すところを刻したものである。泉の水は、直ぐ下をくぐってブリガツハに灑いでいる。その灑ぐところに、ウイヘルム二世が小さい堂を建てて(西暦一九一〇年) Danuvii caput exornavit Guilelmus II., Friderici filius, Guilelmi Magni nepos, Imperator Germanorum という銘を彫らせて居る。独逸人は、このあたりのドナウをば『Junge Donau』というが、発音に快い響を持っている。そこにも掃除夫が居たので、その老いた掃除夫と少しばかり会話をし、泉の水を飲んでそこを出た。公の居城は直ぐ隣だが見ることは出来ないということであった。

寺を見て、それから Karlsbau を見に行った。そこには絵が可なりあった。けれども多くはウルム派、シュワーベン派、それからボーデン湖畔の画家のものなどが多かった。ホ

ルバイン。クラナツハ。グリユネワルドなどのものは模写が多かった。其等の流派のものは、堅く陰気で、清楚で無いところに特色があった。僕には、テエーヌなどの議論も或程度まで受容れていいような気持がその時して居た。

Bezirksmuseum というのを見に行つた。筆筥とか、古時計・著作・靴・うば車・額面など、そういうものが沢山陳列してある。ここにも矢張り古い時代の呵責道具が並べてあつた。それから玻璃はりに画いた農民美術のいろいろのものがあつた、この中には、欲しくて溜まらぬものもあつた。素朴な色と、その配合と、女の顔などの邪気無いところは、僕をして所有心を起させた程である。それから古い寝台のいろいろがあつた。寝台は維也納で、チロール山中地方のものを見て来ているが、此処のものなかなか好かつた。その単純な模様が僕の心を引いた。それから、日本の品物のあるのが僕を驚かせた。漆うるしぬり塗の小筆筥があつたり、竹の模様ある置物台。膳七重。高砂の翁媪図の縫取。書棚。香炉。屏風。大花瓶。太鼓など。目ぼしいものは無くとも、こういう処に日本の物が丁寧に飾られているのは決して悪い気持ではなかつた。譬えば、長崎でセイボルトが伊藤圭介に呉れたという虫目金とか、久能山東照宮にある西班牙マドリ―製の置時計とか、京都市妙心寺の南蛮寺鐘とか、そんなものを西洋の遊覧者が見て起す気持に似ていたかも知れなかつた。少し誇張もある

けれども。

そこに Johann Grund という人の絵があった。これは美術史家の筆端にのぼるものな  
いから、かかる辺土に年を経るのであろうが、僕はその人の画いた女の図を見て静かな快  
楽を覚えた。この画家は豊麗な、可憐な女を画いた。そうすれば、これで本望なので、そ  
ういう覚悟に物哀れなところもあり、倨傲なところもあったのではあるまいか。そんな気  
がして幾つかの可憐な女人図を僕は見ていた。

その処を出て僕はカフェに入った。そこへ遠足に来た女学生の群が入込んで来て、菓子  
売るところにたかっていた。僕の傍に兵士が一人来て、珈琲を飲んで出て行った。僕はそ  
れから、 Gasthaus zur Sonne という食店に入った。上さんは顔の赤い肥った女で、亭主は  
跛であった。そこで僕は、分量の多いソップと、塩辛い料理とを食べた。町内に住む上さ  
んが来て此処の亭主と何か話しているのを聞くと、訛が多くて僕には非常に分かりにくい。  
上さんも亭主も、僕が日本人だなどということに気にせぬらしく、恬然としているところ  
は、<sup>ミュンヘン</sup>民 頭の人などとは丸で違っていた。机のうえに合本した雑誌のあるのを見ると、  
西暦一八九六年発行の [Münchener humoristische Blätter] というのであった。これを見て  
も、僕の今居る食店の程度が分かるのであった。その滑稽新聞には、日本の事などはいま

だ一つもなかった。そのなかに、泥の様に酔った学生を二人の学生が引ぱって連れて行く。雪がさかんに降っている。酔どれの学生の服が引ばれるので段々ぬげて行く、しまいに服だけを二人が持つて向うの方へ行く。肝腎の学生は見えない。そして雪の中に埋まってしまったという絵で、verlorener Studentと題してある、当時の民<sup>ミューンヘン</sup> 頭<sup>ヘン</sup>の学生が如何に沢山麦酒を飲んだかが分かる。それから、[verietelte Liebeserklärung]と題された滑稽図があった。これは、男と女が自転車に乗って相並んで嬉しそうに來るところが先ず画いてある。それから一人の男が石橋の袂で待伏しているところが画いてある。二人が石橋のところまで來ると、待伏していた男が二人を川のなかに、逆様に転倒せしめるところが画いてある。これは、自転車が行り出して、如何に色々の事があつたかを暗指しているのである。僕が維也納を去つて民頭<sup>ミューンヘン</sup>に來た時、先ず気づいたのは自転車乗の民頭<sup>ミューンヘン</sup>に多いところであつた。小さい町の古びた食店で計らずも二十六七年前の世相を觀たような気がして、秘かに僕は満足した。

僕はその食店に居るうち、案内書などを見ながら、今日の午前中の出來事を簡単に手帳に書きつけた。そうして稍疲れたような氣もする、これからどうしようかと思つた。

## 八

この上は一體かみどうなっているだろうか。自分は此処まで来て、ブレーゲがブリガツハに合し、そうしてドナウの源流を形づくるところを見て、僕の本望は遂げた。このさき、本流と看做すべきブリガツハに沿うて何処までも行くなら、川はだんだん細って行き、森深く縫って行つて、谿川になり、それからは泉となり、苔の水となるだろう。そこまでは僕の目は届かぬ。僕は今夕此処を立たねばならぬ。こんなことを思つて古びた食店を出た。僕は時計を持つていたが弾機ばねが途中でこわれて役に立たぬ。此の時計は目覚まし時計で、闇に見ると数字のところの光る様に作ったものである。そういう時計がはじめて日本に入りたてに、鉱山学の方をやっている友の呉れたものだが、奥山などに行くには是非必要だと云つて呉れたのであつた。その時計はだいぶ古くなつて、神戸を出帆するとき神戸の時計店で弾機ばねを直した。それから維也納ウイーンにいるときも、民ミン 頭トウにいるときも度々その弾機を直した。それが今度も汽車の中で毀れてから役に立たぬ時計を持つて歩いていたのであつた。僕は時間を大凡おおよそで見積つてやろうと思つて、いつの間にか川上かわかみの方に歩いて行つた。

川の両岸は少し高くなつて、流を見おろす位置でしばらく歩いた。その両岸は石垣で堅めてある。大体新開の町はずれの気分であるが、古い家も間々残つて居り、大名時代の御用印刷処という文字が古びた壁に残つていたりする。或る役所らしい跡にはウイルヘルム一世の像があつた。そのうち道に敷石が無くなつて、歩くと沙塵が立つた。そしてだんだん家が疎になつてゆき、ついに町は尽きた。そこで道は自ずと低くなつていたので、僕と流とは近づいて来た。その川幅は広くなり瀬をなしている。汀のところ立つと、流が曲ろうとして勢づいているのがよく見える。大体このへんを源としておこうか。何だか寂しいから、もう引返そうかともおもつて、川柳の花のほうけているのを弄んだりなどして暫くそこに蹲んでいた。

それから身を起して、何向も少し歩こうと思つた。そして、水車のようなものがある見え、流を堰いた処をわたつて行つた。人家は全く絶えて、すでに森が迫つて来ている。その両方に迫つて来ている森の間を、まばゆい春の日光に照らされた川は、極くゆるく迂つて流れているのである。

僕は川に接近することを努めながら奥の方へ歩いて行つた。ある時はすぐ川の汀を歩いてた。湿地で靴がぬかり、そこから泡が幾つも音をさせて上つて来るところなどを歩い

た。汀の草は冬がれて未だ芽ぶいていない。

流とそんなに近く歩いているから、直ぐ口を付けて水を飲むことも出来る。然るに水は流れているように見え、ただいっこくに湛えているように見える。その銀色の水に直ぐすぐま顔を接することが出来るが、水はまだ深淵しんえんであつて、水に顔を寄せ瞳をすえて水中を覗くに、汀の土が漸く水中に没し、深いところの土には水草が泥をかむつて生えている。その奥は暗くなつてもう見えない。しかし水の泡がゆるく水面を流れているから水は死んでないのである。

銀色の光る水を湛えて、川は遙か向うの森かげに曲つてしまふ。僕の近くの川は訣なく跨ぐことの出来るようにおもうのは、水面と僕と距離の親しさがあるためであつた。けれども川はやはり水の量豊かで、底にこもる不可犯ふかほんのこの厳きびしさはおのずから大河の源流を暗指していたから、僕は心中に或る満足をおぼえたのである。小さい蛙が岸から水中に入つて泳ぐなら、少し泳いだと思うとまた戻つて来ただろう。その蛙は流にながされるようなことはない。極く放埒に戻つて来ただろうと思つた。

響がして来て対岸の向うの森のところを汽車が通つて行つた。この汽車は流に沿うて川上の方に通じた支線鉄道のうえを走つて行くのであつた。銀色の川が向うの森の麓をゆく

とき紺のいろを現出した。僕は鉄道線路の橋を渡って、今度は向側を歩いて行つた。まだ芽ぶかない灌木の群生しているところから向うを見ると、さつき森のかげに曲つて行つた川が目路から開けて来て、それがまた遙か向うに没している。そのところに村が見える。点在している赭い屋根の間に、寺院の尖塔が一つあつて、それが村の中心を保っている。

僕は二時間半はたつぷり歩いただろう。そう見積つて汀を離れて丘をのぼつて来た。そこに村から村へ通ずる道があつた。そこまで来た。眼界が開けたから、森は暗黒の色を帯びて幾重にも畳なわつて見える。その緩慢な曲線は何かの膚のようであつた。その奥の奥に川の源があるのであるが、そういう落葉がくれの水、苔の水の趣味は差向きここに要求しなかつた。

けれども、この細くなつて西北の方に消えている川が、写真に撮れるだろうかどうかなどと思つてみると、下手の方から自転車でのぼつて来た二人の村人が行過ぎしなに、「キナ人かな」などと問答するこえが聞こえた。僕は午食をした食店を出てから、一度も独逸語を使わなかつた。ただ水際を歩いて、時々日本語でひとり言を言ったのみであつた。そこから僕は、今度はその道に拠つて、ドナウエシンゲンへどんどん引返した。時間は殆ど目分量で極めていて不安心だから、時には駆歩をした。

あるところに来ると家が二軒あって、そこで鶏が黄いろい家鴨の雛を育てているところがあった。家鴨の雛が無遠慮でいるのに鶏がしきりに気にしていると僕も僕の目についた。そのうち二たび両岸の高いところの川べりに来た。古い家に向日葵ひまわりのような花を黄に大きく画いたのがあった。宿に著くと時がまだ少しあった。僕は顔を洗い勘定をすましそれから麦酒ビールを一杯飲んだ。

## 九

汽車は午後四時二十分に此処を発した。日は未だそう傾いてはいない。汽車のなかで僕は幽かに淫欲のきざすのを感じた。僕は虫目金を出して地図で川の源の方へ辿って行った。川は森と森の間の平地を縫うて、Villingen 《ウィリンゲン》の町に著く、そこまではあのように銀いろをした静寂な川に違いない。そこからは森と森の間が狭くなって、谿をなしている。そこをGropper 《グロッペル》の谿と名づける。川はそこを流れている。そこからもつと川上へ辿って行くと、川は西の方へ緩く曲って、遂に無くなってしまふ。そこはブリガツハの森である。そこから水が出でて来るのであった。

汽車はドナウに沿うて走り、イムメンチンゲン駅までは元来た同じ道に戻るのである。ドナウは午後の日を受けて飽くまで白く光っている。そして平野のなかを、流れるか流れぬか分からぬような工合で流れている。岸に枯れた葦のあるのが見える。鴉が四五羽岸の処に飛び、時には雁が浮いている。このあたりは来るとき明月の光で見た処である。或処では原始的な橋の架かっているのなどが目に付いた。麓の村からその背後の森に入つて行く白い路などが見える。その丘のうえに牛が耕している。耕したところが褐色になつて見える。暫くすると、峽間になつてドナウはその間を流れた。汽車は今度は丘のうえを走つたからドナウを見おろすようになった。このあたりは来る時に月明で見たのかも知れない。隧道をくぐると落葉樹林でその間に常緑樹も交つている。落葉樹は未だ微かな芽を吹いているに過ぎない。汽車がイムメンチンゲン駅を出ると間もなく、僕等はドナウと別れた。それから大きな隧道一つくぐると谿が開けて、緩く起伏する丘陵と、その間に埋まるようにしている村が見えた。それから汽車はまた深い山中を走り、やがて谷間を見おろすような位置を保ちながら走つた。そのあたり一面の落葉樹林は広大で規模が大きかつた。それから国土は下り坂になつて、汽車は南方の平野に向つて驀<sup>まっしぐら</sup>地に走つた。して見ると、ドナウはやはり高原を流れていたのだということを僕はおもつた。午後五時四十分に、

汽車は Engen 《エンゲン》 駅に著いた。

〔Go:tungen〕 《ゲッチンゲン》 〔Tu:bingen〕 《チュビンゲン》 などは名ある都市だが、日本の留学生は、「月沈原」<sup>ゲッチンゲン</sup> などという字を当てて寂しい心を遣ったものである。そういう特有の音を有っている町村はドナウの源流あたりを中心にしてなかなか多い。ドナウエシンゲンを始として、ツットリンゲンというのがある。リプチンゲン。ハッチンゲン。ウルムリンゲン。シグマリンゲン。ウイリンゲン。ツンニンゲン。メッチンゲン。デッチンゲンというのがある。それから東北の方の道筋には、プリンゲン。トロホテルフィンゲン。コムメルチンゲン。インネリンゲン。ミュンジンゲン。ライヒンゲンなどという都邑がある。こういう都邑の名称も旅人の僕の興味をひいた。何となく素朴で、「黒林」の情調とドナウののろい流の趣とに、この撥音が却って旨く当嵌まるような気がしたのであった。

それから、「黒林」地方の女達の風俗などのこともおのずから僕の心にのぼって来た。男も女も何か事があると、そういう風俗をして現代の街を歩いて居た。古代の姿なまりをした、舞台に出て来そうなものが、街頭がいとつを歩いているのであった。そういう幾たりかの男女を、僕は或日 Freiburg 《フライブルク》 で見た。けれども、それが山間の村などで見ると、非

常に静かな調和があつた。古い寺院からは、皿のような帽子に房の沢山ついたのを冠つた女が沢山出て来たりした。女の帽子は或時は小さい土耳其帽のような形に黒い布が付いたのを、のところで結んでいた。或時は非常に大きなリボンのついた帽子をかぶっていたり、紅い大きな毛玉の幾つもある帽子をかぶっていたりした。胸当には種々の縫取がしてあり、胸当は紅いのもあり紺のもあり白青のもあり色々であつた。処女は頬が赤く、みな健康な性欲をおもわしめた。会釈をするときに頬に微笑を湛えて脣の角の<sup>かど</sup>ところに一寸<sup>たて</sup>豎の皺<sup>しわ</sup>を寄せてもの言うのはモナ・リザを連想せしめた。

## 十

僕等はドノウから別れてだいぶ来た。今著いたエンゲンの停車場で窓から僕は外を覗いていた。そこから見える寺は尖塔は暗緑に塗られてあつた。そして、小さい窓のところは褐色で、そのほかの寺の部分は灰色である。それを僕は一寸手帳に書きつけた。そのうち汽車が動き出した。そのあたりには実に古い小さい家が並んでいる。玩具のような窓から童女<sup>どうじょ</sup>が顔を出していたり、青味がかつた野の斜面に童が五六人固まって寝ていたりする

のが見える。向うの道を女が自転車を通った。家の前で焚火をしてあってけぶりいる。つまりフィルムを見ているようで慌しいが、異境を歩いているような感じがやはりしている。

汽車は平原を走るが、向うには尖った山が見えている。それがアルプスのような峻峰ではない。そして黒ずんだその山がなかなか近寄らないのを、何心なく見ていたりする。先程から汽車が川に沿うて走っている。岸の柳は芽を吹いてもう萌黄になって居る。「あの川は何といいますか」「あれですか、Aach《アーハ》川です」「どう綴りますか」「AA CHと綴ります。この先の方にある町の名を取ったのです」。極く小さい川だが、その客は川の名を知っていた。それから、僕が東洋人だなどということ余り気にかげぬらしい。

六時五分に Singen 《シンゲン》の停車場に著いた。そこには峻しい山があつて古城の残りなどが見えていた。寺院が三つも四つも見えるところで、町のなかを川の流れている。かなりの町である。[Reformpa:dagogium] とか、Hauptzollamt などの看板も見える。瑞

西へ入る乗客は、ここで乗換えて行くのであつた。そう思えば国境らしいところもあり、暫くすると人がどやどや乗込んで来た。その時可哀らしい娘がひとり乗って僕の前に腰かけた。娘は直ぐ手提かばんを明けて、チョコレートを出して食べた。それから手<sup>ハンケチ</sup>巾で鼻をかんだ。それから手提かばんの中を何か音させていたが、しまいにそれを閉じた。それ

から絵入雑誌を出して暫く見ていたが、二たび手提かばんを明けチョコレートを出して食べた。そのうち空が一面に曇つて来て、汽車は、[Bohringen 《ベオリンゲン》-Rickeリッケルス  
Ishausen] に著いた。

右手には既に湖が見え出して、そのあたりに並木が規則正しく立って居るのはポプラらしい。湖が段々大きくなり、島なども見える。ここは入海の様などころであつた。これが Untensee 《ウンテルゼー》である。対岸の村もその寺院も霞んでいる。汽車が岸に沿うて走ると、汀の白き小石さざれが見える。それから養魚池。豚と其の兎ども、枯葉をもやしているところ、犬が棧橋を下つてゆくところ、それ等が映画のようである。暮色が蒼然として至つた。

それから急に眼界が広くなつた。これは、Bodensee 《ボデーゼー》の大湖が見え出したのである。隣の乗客は口笛を吹き出した。これは何か俚謡のようなものを歌うらしい。暮靄ぼあいが低く湖水こすいをこめて、小山の上の方だけが浮出ているように見える。途中でそこに連隊でもあるらしく番兵のいる門などもあつた。それから、煙突の太いのが見え出す。寺が見える。或る橋を渡ると両側の町が急に綺麗になり、人の往反が活潑になつた。汽車は onstanz 《コンスタントツ》に著いたのである。停車場の時計は七時半を指している。

僕はここの湖畔の旅舎に一夜ねむり、あくる日は此の太湖を縦断して、アルプス山系の延びて来ている南独逸の山中に行こうとするのである。そこで、ついにはドナウへ灑ぐ筈の、「迂りながら急いで谷へながれ入る無数の小川」を見ようとするのである。



# 青空文庫情報

底本：「日本の名随筆15 旅」作品社

1983（昭和58）年9月25日第1刷発行

1996（平成8）年8月25日第25刷発行

底本の親本：「齋藤茂吉全集 第五卷」岩波書店

1973（昭和48）年11月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2010年5月30日作成

2011年4月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ドナウ源流行

齋藤茂吉

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>